

遺稿「ドイツ・イデオロギー」第1巻第 1篇（フォイエルバハ）の新版について

中 野 雄 策

ま え が き

25才のエンゲルス (F. Engels) と 27才のマルクス (K. Marx) とが、若日の闘志と天才のすべてをかけて執筆した大部の原稿（それはのちに、マルクス自身によって「ドイツ・イデオロギー」(Die deutsche Ideologie) と名づけられた) のたどった運命ほど、われわれをいまもっていらだたせるものはない。新しい革命的歴史観・社会観の誕生をつげるこの著作が前世紀40年代の反動的で非学問的なプロシヤの風土にそぐわなかったとしても、それはおどろくにあたらぬ。しかし、この貴重な遺稿を手にしたドイツ社会民主党のリーダーたち（なかんずくベルンシュタイン (E. Bernstein)) の扱い方は、彼らがマルクス主義者をもって任ずるかぎり、とてもまじめなものとは思われない。このことは、エンゲルスの没後30年間に公表されたのが、遺稿の半分以下であったということに如実にあらわれている。そのため、もっとも重要な部分である第1巻第1篇（フォイエルバハ (Feuerbach)) を公刊して学問的研究の場に引き出す事業はソヴェト政権のもとでようやく実現されたのである。

マルクス主義的社会科学の形成過程を、前世紀40年代（とくにその前半）の諸著作を通じて明らかにしようとするところみは、戦後のマルクス研究のなかでいよいよ強い潮流になりつつあるかにみえる。そのさい、初期マルクス主義のピークを「経済学・哲学手稿」(Ökonomisch-philosophische Manuskripte) と「ドイツ・イデオロギー」のうちにもとめることについては、おそらく異論はないであろう。しかし、同時にまた、初期マルクス研究における「経・哲手稿」への傾斜と「ドイツ・イデオロギー」にたいするある種の過少評価を感じるのは筆者だけではない。 「若いマルクス」を「老いたマルクス」に対置するだけでなく、前者だけがほんもののマルクスであるとして「資本論」から「経・哲手稿」へ退却することを提唱したり、あるいは逆に「経・哲手稿」以前のマルクスはマルクスではないとして棄てざる、というような戦後の初期マ

マルクス研究の一部にみられる傾向は、いずれにしても、「経・哲手稿」と「ドイツ・イデオロギー」における思想と理論の内的関係にたいする研究不足（とくに後者の研究不足）のうちに主な原因があることはまちがいないであろう。現実的ヒューマニズムから共産主義への思想的転換にひきつづいておこなわれた唯物論的歴史把握 (materialistische Geschichtsauffassung) の確立こそは、マルクス主義的社会科学の形成の第1の標識である（第2の標識が剰余価値学説であることはいうまでもない）が、唯物論的歴史把握そのものの形成過程の軸心をなすものは、「経・哲手稿」における疎外理論から「ドイツ・イデオロギー」における分業論への基礎カテゴリーの転回である。すなわち、分業の歴史的發展を論理的に要約することによって唯物論的歴史把握の基本命題（生産諸力と交通形態の対立と統一）が導出され、共産主義革命の必然性が論証されたのである。「ドイツ・イデオロギー」のもつすべての重みはこの点に存するし、またこの点から派生するといってもあながち強弁とはいえないのであろう。ところが、唯物論的歴史把握の積極的論述がみられる「ドイツ・イデオロギー」冒頭篇（フォイエルバハ）は、従来かならずしも満足な形で公刊されていないのであって、そのために、この遺稿自体の学問的研究がさまたげられたばかりか、初期マルクス（エンゲルス）の思想と学説の研究や、さらにはマルクス主義的社会科学全体の理解や発展にたいしても少なからぬ否定的影響を与えたことが予想される。

したがって、このたびソ連邦共産党中央委員会付属マルクス・レーニン主義研究所の手によって「ドイツ・イデオロギー」第1巻第1篇（フォイエルバハ）の新版が編集公表されたことは、旧版の本質的欠陥をとりのぞくことはもちろん、上述のような否定的影響をも克服するための不可欠の前提が提供されたことを意味するのであって、遺稿を直接手にすることも見ることもできないすべてのマルクス研究家の期待にそうものである。

本稿は、新版公表によせて、この遺稿が従来たどってきたユニークな歴史を文献学的に反省すると同時に、主として、発表された新版の構成と内容および編集者バガトゥリヤ（В. Багатурия）によってひき出された内容解釈上の若干の新たな結論を紹介することによって、新版が原語あるいは邦語で紹介されるまでの研究上の空白をいくらかでも小さくすることを目的とするものである。^①

① 「ドイツ・イデオロギー」第1巻第1篇（フォイエルバハ）の草稿新版は、下記の

文献で公表された。

Новая публикация первой главы «Немецкой идеологии» К. Маркса и Ф. Энгельса, Вопросы философии, No. 10, 1965, стр. 78~107, и No. 11, 1965, стр. 111~137.

なお、編集者バガトウリヤによる下記の研究論文が併載されている。

Б. Багатурия, Структура и содержание Рукописи первой главы «Немецкой идеологии» К. Маркса и Ф. Энгельса, Вопросы философии, No. 10, 1965, стр. 108~118.

I 遺稿「ドイツ・イデオロギー」の歴史から

さしあたり、新版が出るまでにこの草稿全体がたどった歴史をふりかえってみよう。

1845年春にブリュッセルでおちあったマルクスとエンゲルスは、ヘーゲル以後のドイツ哲学（フォイエルバハと青年ヘーゲル派）および小ブルジョア社会主義のドイツ的変種（真正社会主義の諸潮流）にたいして共同して立ちむかうことをきめ、さっそく準備にかかった。しかし実際に草稿の執筆にとりかかったのは同年11月であったといわれる（従来は9月説が公認されていたが、新版では上記のように訂正のうえ確定されている）^①。草稿にかんする作業は翌1846年夏以前にはだいたい終了しており、第1巻、第Ⅱおよび第Ⅲ篇（ブルーノ・パウアー（B. Bauer）およびマクス・シュテイルナー（M. Stilner）をあつかった部分）と第2巻（真正社会主義をあつかった部分）とが、清書稿として出版社に送られたことはほぼまちがいないとされている。ただし、第2巻のうち遺稿中に現存しているのは、真正社会主義と表題をつけられたみじかい序論的部分とⅠ、Ⅳ、Ⅴと記号づけられた3つの篇だけで、当然予想されるⅡ、Ⅲと記号づけられたはずの2つの篇がはじめからなかったのか、それとも紛失されたのかは、新版でも確定されていない^②。周知のように、当時、草稿全体の出版は成功せず、わずかに第2巻第Ⅳ篇（カール・グリューンをあつかった部分）のみが、1847年中（8～9月）に公表されたにすぎない^③。

その後まもなく、マルクス、エンゲルスは、彼らの著書の出版をあきらめたのであるが、生前、こうした草稿が執筆されたことについて、それぞれ少くとも1度ずつ言及したことがある。マルクスは、草稿執筆から約12年ののち、「経済学批判」（Zur Kritik der Politischen Ökonomie, 1859年）の序文のな

かで、自分の経済学的研究の経過をふりかえりつつ、この草稿についてつぎのようにのべている。「部厚い八つ折判2冊の原稿がヴェストファーレンにある出版所にとどいてからかなりあとになって、われわれは、事情が変わったので出版できないという知らせを受け取った。われわれはすでに自分のために問題を解明するというおもな目的を達していたので、それだけ早く原稿を鼠どもがかじって批判するままにさせた。」^④そして実際に、草稿は鼠のかじるままに放置され、40年以上の歳月が経過した。この間、マルクスもエンゲルスも、ついにふたたびフォイエルバハと自分たちとの関係について公にのべることをしないまま、マルクスの死をむかえたのである。このとき、エンゲルスが、みずからその創始者のひとりであるマルクス主義の思想的、理論的素性について、証言しておくことを、「未済の信用借」^⑤と考えたことは、ごく自然のことであろう。かくして、名著「ルードウィヒ・フォイエルバハとドイツ古典哲学の終焉」(Ludwig Feuerbach und der Ausgang der Klassischen deutschen Philosophie 1883年)が書かれることになった。当然、かれは、フォイエルバハにかんする40年前の旧稿(「ドイツ・イデオロギー」第1巻第1篇)をひっぱり出し、よみかえたわけだが、そのさい旧稿にかんしてつぎのようにのべている。「ここでは、フォイエルバハにかんする節はまだ完成していない。できあがっている部分は、唯物論的歴史把握についてのある説明からなっているが、この説明はただ、経済史についてのそのころのわれわれの知識がなおいかに不完全なものであったかを証明するにすぎない。フォイエルバハの学説そのものの批判はそのなかには欠けているので、この旧稿は、当面の目的には役に立たなかった」^⑥。たしかに、フォイエルバハにかんする草稿は、形式的にはもちろん、内容的にも完成しているとは認めがたいし、かの40年間に達成された科学としての歴史学の進歩を考えれば、「経済史についての知識不足」ということも(リャザノフのみるように)^⑦必ずしもけんそんとばかりはいえないだろう。むしろ奇妙なのは、「フォイエルバハの学説」にたいする批判が旧稿中に存在しないという1句である。われわれのみるところ、草稿第1篇のなかにはフォイエルバハにたいする根本的な批判が少なからずふくまれている。このばあい、ふたとおりの解釈が可能であろう。ひとつは、エンゲルスがほんとうは旧稿をよみかえさなかったために、そこにふくまれていたフォイエルバハ批判を思い出さなかったのだ、と考えるばあいである。よみかえして、しかもみのがすほどにエンゲルスが老いおとろえてはいないはずだからである。いまひとつは、第1篇は、フォイエルバハの学説の詳細にわたる批判をふくんでいない、という

意味に理解するばあいである。われわれは、リャザノフに反して、後者をとりたい。一見してわかるように、「ドイツ・イデオロギー」第1巻第Ⅱ篇以下は、いずれも、批判を加えるべき論敵の著書を引いてはたたく文字どおりポレーシクポレーシクの形式をとっている。ところが、第1巻第Ⅰ篇は、フォイエルバハと題されながら、内容からみて主題はむしろ唯物論的歴史把握の積極的展開となっており、フォイエルバハの思想と理論はそのための素材としてするどく簡けつにとりあげられ批判されているにすぎない。もともと、「ドイツ・イデオロギー」第1巻の3つの篇は並列的なものではなく、だいたいにおいて、理論（歴史観）の積極的論述（第Ⅰ篇）と当面の論敵にたいする全面的批判（第Ⅱ、Ⅲ篇）という两部分から立体的に構成されているのである。このように理解するとき、1883年当時のエンゲルスが、旧稿をよみおわった（であろう）のち、草稿末尾に鉛筆がきで、「Ⅰ フォイエルバハ、唯物論的な見かたと観念論的な見かたとの対立」と付記して、第Ⅰ篇の表題をいくらかでも内容にちかづけておこうとした理由がわかるのである。しかも、エンゲルスがこの時点で稿末に上記の表題を付記したことは、かれがこのふるい草稿をもはや歴史的意義をもつ遺産として扱い、そのまま保存する意図をもっていたことを明らかに示している。

しかし、エンゲルスの没後遺稿の管理にあたったベルンシュタインは、リャザノフの証言するところでは^⑧、この遺稿をはなはだ粗雑にあつかったといわざるをえない。かれは、今世紀にはいってようやく、草稿の第1巻第Ⅲ篇（シュティルナーをあつかった部分）を「社会主義諸文書」^⑨のなかで公表しはじめたのであって、しかもそれすら完結するにいたっていない。しかも当時かれは、草稿全体の構成についての正確な知識をほとんどもたず、せいぜいこのⅢと記号された草稿が、「ライプチヒ宗教会議」と題するより大きな草稿の一部であるということに気づいていたにすぎない。その後10年たって、さらに、第1巻第Ⅲ篇のなかのごく小部分（C. 我が自己享楽）だけをタイプライター複写版「労働者雑報」に発表したにとどまり、それ以後はみずからの手で公表の努力はしていない。

「ドイツ・イデオロギー」草稿の完全な学術的な出版は、ソヴェト政権のもとではじめてくわだてられ、実現された。マルクス・エンゲルス研究所（モスクワ）は、まず、遺稿中の最重要部分であり、未完の草稿である第1巻第Ⅰ篇を、1924年にロシア語^⑩で、1926年には原語すなわちドイツ語^⑪で公表してい

る。ここにはじめて草稿第Ⅰ篇の全容が明るみに出て、われわれの共通の財産となり、学問的な研究の対象となったのである。

全体としての遺稿編さんにかんする研究所(したがって編集者たるリャザノフ)の功績のひとつは、当時その連関が正しく認識されていなかった草稿中の諸篇を正しく位置づけたことであるが、なかんずく、「ライプチヒ宗教会議」と題された独立の清書稿の末尾にエンゲルスの筆跡でⅡという分類番号が記され、同時に「ブルーノ・バウアー」という表題がつけられていることを発見したことである。それによって、この草稿がⅢと記号づけられたシュティルナーにかんする篇と連結させられ、相合して「ライプチヒ宗教会議」と表題された草稿の全体をなすことが確認されたのである。リャザノフの功績のいまひとつは、かれがかつてローラ・ラファルクから入手したマルクスの手になる断片が、「ドイツ・イデオロギー」第1巻全体への序文であることを確認したことであろう。

しかし、リャザノフは、清書稿として存在していた(そしてそのうちのかなりの部分がすでに公表されていた)他の諸篇の印刷にさきだって、最重要部分であり、しかも未完成の草稿として伝えられた冒頭の1篇の公表をいそいだ。そのさい採用された草稿編集の基準は、すべての材料をマルクスによるページづけにしたがって配列するということである。この基準の脊後には、第1巻第Ⅰ篇の草稿は形式的にも内容的にも未完成であり、何らかの加工によって名実ともに首尾一貫した作品に仕上げることはできないということ、したがって材料はナマのまま提供されるべきだという観点があった。こうした基準は、草稿の構成と内容にかんする当時の研究水準と公表の緊急性からして、ある程度さげられないとしても、やはり本質的欠陥をまぬかれるものではなかった。マルクスによる草稿の一貫したページづけは、けっして保存のためにのみつけられた便宜的なものではなく、のちの仕上げを予定しながらも草稿の内容上の連関にもとづいておこなわれたものであるから、テキストの配列をこのページづけに対応させることはくずすことのできない最低の原則である。しかし、草稿の形式はやはり首尾一貫していないのであって、公刊にあたっては、草稿で叙述されている思想と理論の内的連関にしたがって加工されるべきであり、さらに適当な分割によって複雑な構成をもつ草稿の内容を理解しやすい形にあらためるための努力は必要である。リャザノフ版に固有の読みにくさ、わかりにくさ(ときにはまったく無意味な連関)は、採用された編集基準から生ずる当然

の結果であったのである。その上、リャザノフ版には、テキストの解説におけるあやまりが多いことも読解と研究を大いにさまたげることになった。しかし、この版はその後多くの国語にほん訳されて普及したといわれる。

マルクス・エンゲルス・レーニン研究所（モスクワ）は、数年の研究を経て、第1巻第I篇草稿の初版（リャザノフ版）の本質的欠陥を克服するとともに、遺稿全体をふくむ「ドイツ・イデオロギー」のさいしょの完全な版を準備し、1932年にはドイツ語で¹² 1933年にはロシア語で、いずれもマルクス・エンゲルス著作集（初版）のなかで公刊した。¹³ マルクス主義形成期のこの古典的著作は、こうして、執筆後86年（エンゲルスの死後37年）にしてようやくその全貌を明らかにされたわけである。この版（それは編集者の名をとって、アドラツキー版とよばれている）の準備過程で草稿の解説作業が入念におこなわれたであろうということは、一見してすぐにわかる。われわれは、アドラツキー版によってはじめて原典のほぼ完全なテキストを与えられた上、編集者による詳細なテキスト批判をも提供されたのである。しかし、アドラツキー版は、テキストの配列と分割については旧版とまったくちがった基準を採用していた。アドラツキー自身は、「個々の草稿ならびに全体の印刷完成に際して、われわれが準拠した原則は、「ドイツ・イデオロギー」をば、マルクスおよびエンゲルスによって1846年7月の発表中止のまえに計画されていたままの形で再現するということであった」¹⁴ とのべているだけで、それ以上の報告はしていない。しかし、アドラツキー版における第I篇（フォイエールバハ）草稿の編集ぶりは、多くのパラグラフをおきかえるばかりか、各パラグラフの内部においてすら個々のセンテンスは分断されたりおきかえられたり連結させられたりしており、原著者の「計画」のもっとも確実な根拠であるはずのマルクスによるページづけがほとんど無視されていることは明白である。最新版（1965年—これについては本稿2節以下でくわしく紹介する）の編集者は、アドラツキー版についてつぎのようにのべている。「この第2版を準備したものは、マルクス・エンゲルスの未完の草稿をそれがわれわれの手に入ったままの形で印刷されることは目的にかなっていないということ、および、欄外への原著者注記が仕上げのために必要かつ十分な指示を与えているということから出発した。第I篇のこうしたテキストに照応して、ほぼ40の断片が分割され、その相互的配列が変更され、一連の欄外注記が表題として解釈された。テキストのこうした計画変更の結果、研究と叙述の内的論理は破壊され、本質的連関がくずされ、人

為的なものにおきかえられ、一連のばあいには偽作とさえなりはてた。編集者のつけた表題の体系は草稿の構成と内容にふさわしくない」^⑮

未完の草稿に何らかの手(配列と分割および表題の選択)を加えることによって読解と研究を容易にすることは、たしかに必要なことであるが、それも原著者による「計画」を破壊しないかぎりにおいて必要となるにすぎない。最新版編集者(バガトウーリヤ)の指摘しているように、当時の研究水準の低さを一半の理由としえても、アドラツキー版にみられるような詳細にわたる勝手な計画変更が許されるべきでないことは明らかである。^⑯

1955年に公刊された現行版「ドイツ・イデオロギー」^⑰は、くわしい学術上の参照資料をつけられたがぎりでは、ふたつの旧版よりずっと改善されている。だが、第1巻第I篇草稿の材料の配列と分割にかんしてはいぜんとしてアドラツキー版で採用されたものを踏襲しており、したがって後者のもつ本質的欠陥をもそのままひきついでいる。

1962年になると、アムステルダムの社会史研究所で新たに発見された「ドイツ・イデオロギー」草稿の3つの断片が公表された。この3つの断片のうちの2つは第1巻第I篇に属するものであり、他のひとつは第III篇のものである。^⑱

こうしてこんにち、「ドイツ・イデオロギー」第1巻第I篇草稿の新しい完全な学術的出版をおこなう必要性と可能性はいちじるしく高まった。いぜんとして第1巻第I篇草稿の9ページ分は発見されてはいない。しかし、マルクスによるページづけに準拠し、研究と叙述の内的論理からひき出される配列と分割と表題をもった、もっとも妥当な編集バリエーションを公表することは、この古典の普及と学問的研究の出発点としてとにかく必要不可欠の事業であって、このたび公表された最新版こそは、こうした实际的・学問的要請に応えるものである。編集者バガトウーリヤは、最新版の公刊がもつ3つの意義をつぎのように指摘している。^⑲

第1に、最新版によってはじめて、草稿の真の内容を理解し、史的唯物論を、それが「ドイツ・イデオロギー」で研究されたようなオリジナルな形で理解するための無条件に必要な前提がきずかれたこと。

第2に、草稿の真の構成を知ることによって、「ドイツ・イデオロギー」の執筆過程における史的唯物論の重要な命題の発展をフォローすることが可能となること。

第 3 に、草稿の構成と内容を知ることによって、「ドイツ・イデオロギー」とマルクス・エンゲルスの先行および後続の諸著作との相互関係を理解することができるし、それによってマルクス主義の発展史における「ドイツ・イデオロギー」の地位を客観的に確定する可能性が与えられること。

- ① См. Вопросы Философии, No. 10, 1965, стр. 80 и стр. 110.

なおバガトウーリヤは、草稿執筆時期の考証にかんして下記の 2 文献の参照を求めている。

Вопросы истории КПСС, No. 10, 1964, стр. 152.

Научно-информационный бюллетень сектора произведений К. Маркса и Ф. Энгельса, No. 11, М., 1964, стр. 70, 80~82, 88, 89, и No. 12, М., 1965, стр. 30~40.

- ② 草稿第 2 巻の第 II および第 III 篇について、アドラツキーは、第 2 巻の草稿全体が出版社へ送られたさいに紛失したとも考えられるとしている（邦訳「ドイツ・イデオロギー」1947年、ナウカ社、第 1 分冊、14 ページ、参照）
- ③ マルクスは、1847年 4 月のグリーン批判（「カール・グリーンに反対する声明」、邦訳、マルクス・エンゲルス全集、第 4 巻、34~37 ページ。ここではじめて「ドイツ・イデオロギー」という書名が用いられている）においてはまだ、「ドイツ・イデオロギー」の出版予告を行っているから、著作全体の出版を一応あきらめたのは同年 4 月から 7 月にかけての時期であることが推定される。このことは、エンゲルスが、同年 1 月から 4 月にかけて、「真正社会主義者たち」と題する（やはり未完の）論評を執筆しつつつづけていたことから間接的にうかがえる。
- ④ К. Маркс, «Экономическая критика», Маркс-Энгельс全集, 第 13 巻, 1964 年, 7~8 ページ。
- ⑤⑥ F. Энгельс, «Рудольф Вильгельм Фойエルбах и конец немецкой классической философии», Маркс-Энгельс全集, 第 15 巻, 大月書店, 1950 年, 424~425 ページ。
- ⑦⑧ 邦訳、「ドイッチェ・イデオロギー」、岩波文庫、1930 年、18 ページ以下を参照
- ⑨ E. Bernstein, Dokumente des Sozialismus, 1903~1904.
- ⑩ Архив К. Маркса и Ф. Энгельса, кн. 1. 1924.
- ⑪ Marx—Engels Archiv, Bd. 1. 1926.
- ⑫ Marx—Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Band 5. 1932.
- ⑬ なお、最新版編集者によると、リヤザノフ版、アドラツキー版をふくめて、この 40 年間に世界各国で公刊された第 1 巻第 I 篇の草稿は、合計 50 以上であるということである（そのうち「ドイツイデオロギー」の一部としては 35 回を下らず、独立のものとしては 15 回を下らない）。

- ⑭ 邦訳、「ドイツ・イデオロギー」、1947年、ナウカ社、第1分冊、13ページ。
- ⑮ Г. А. Багатурия, Структура и содержание рукописи первой главы «Немецкой идеологии» К. Маркса и Ф. Энгельса, Вопросы Философии, No. 10, 1965, стр. 109~110.
- ⑯ すでにわが国では、広松渉氏が、アドラツキー版の本質的欠陥をつぎのように指摘している。「アドラツキー版では、草稿を一旦バラバラに切りきだんたうえで、いわば糊と鉄でつぎはぎしている。……アドラツキー版でのつぎはぎたるや、パラグラフ単位での配列がえといったものではなく、ひとつのパラグラフをすら切りきざみ、それを全然別個の文脈で書かれた、草稿では数十頁もへだたっている文章の一部と結びつけて新規にパラグラフを作りあげるといった大胆きわまりないものである。しかも御丁寧なことには、原稿の文章どおしのつぎはぎではどうにもならない場合など勝手につなぎの言葉を挿入している」。氏は、したがって、現行版「ドイツ・イデオロギー」は事実上偽書に等しい」と断定されたうえ、草稿に詳細な文献学的検討を加え、まったく新たな編集バリエーションを提案している。(「唯物論研究」日本唯物論研究会編集、青木書店、1965年春号、104~130ページ参照)
- ⑰ К. Маркс и Ф. Энгельс, Сочинения, Издание второе, том 3., ИМЕЛС при КПСС, 1955
Karl Marx-Friedrich Engels Werke, Band 3, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, 1958
邦訳「マルクス・エンゲルス全集」第3巻、大月書店、1963年。
- ⑱ S. Bahne, Die deutsche Ideologie von Marx und Engels, Einige Textergänzungen. In: International Review of social History, Vol. VII, Part 1, 1962.
この3つの断片は、わが国ではすでに、邦訳「マルクス・エンゲルス全集」第3巻(大月書店、1963年)603~606ページで、いちやく紹介されている。ただし、ここでは、草稿第1巻第1篇に所属しながらもまったく関連のない2つの断片が連結させられたままである(次節参照)
- ⑲ См. Г. А. Багатурия, Структура и содержание Рукописи первой главы «Немецкой идеологии» К. Маркса и Ф. Энгельса, Вопросы философии, No. 10, 1965, стр. 110

Ⅱ 新版「ドイツ・イデオロギー」第1巻第1篇(フォイエルバハ)の構成と内容

以下この節では、新版へのマルクス・レーニン主義研究所の序文、新本文への注および編集者バガトゥーリヤによる研究論文^①その他を利用して、「ド

「イツ・イデオロギー」第 1 卷第 I 篇の新版における材料の構成と、そこから得られる内容解釈上の若干の結論を紹介しよう。

(1) 新版の構成とその文献学的根拠

まず、われわれに遺産としてつたえられた草稿のナマの状態を一べつしておかなければならない。第 1 卷第 I 篇草稿（フォイエルバハ）は、2つの束からなっており、大きい方の束にある草稿は、エンゲルスによるボーゲン番号とマルクスによるページ番号とが重複してつけられている。ボーゲン番号とページ番号との対応関係を表示すればつぎのようになる。②

ボーゲン	?	6	7	8	9	10	11	20	21	84	85	86	87	88	89	90	91	92		
						a b	a c	a b	a c d									a b		
						} d	} b	} d	} b											
ページ	1	8	12	16	20	24	27	29	30	33	35	40	44	48	52	56	60	64	68	72
	} 2	} 11	} 15	} 19	} 23	} 26	} 28	} 32	} 34	} 36	} 39	} 43	} 47	} 51	} 55	} 59	} 63	} 67	} 71	} 75

表からわかるように、エンゲルスによるボーゲン番号は、6にはじまり92におわっているが、その間12~19および22~83の合計70ボーゲンにおよぶ大きな欠落がある。他方、マルクスによるページづけは、1にはじまり72におわるもので、欠落は3~7および36~39の合計9ページと比較的少ない。③

草稿中のいまひとつの小さい束は、明らかに清書稿と考えられる2つのバリエーションをふくんでおり、さきに書かれたとみられる第1バリエーションは番号づけを一切欠いているが、第2バリエーションは1から5までのボーゲン番号をもっている。

さて、新版編集者は、「I フォイエルバハ」と表記された草稿全体が、同時期に一挙に書きおろされたものではなく、ことなった時期にことなった連関において執筆された（それぞれ相対的に独立している）5個の部分からなる、という解釈から出発している。マルクスとエンゲルスは、はじめ、フォイエルバハ、パウアー、シュティルナーの三者にたいする批判を同時に展開する予定で執筆しはじめたが、執筆過程で計画を変更し、パウアー、シュティルナーの批判には特別の篇（すなわち、II. 聖ブルーノおよびIII. 聖マクス）をあてることに決定したのであるが、そのさい、フォイエルバハを批判すると同時に自分たちの積極的見解をのべる序説的な篇をもうけることにしたのである。この計画

変更にしたがって、すでに執筆された部分から、バウアー、シュティルナー批判にかんする部分をきりはなして、それぞれ第Ⅱ篇、第Ⅲ篇に移した。第Ⅰ篇草稿中で時期的にもっともはやく執筆された部分は、このようにして形成されたのであり、それはマルクスによって与えられたページづけのうち1から29までをふくんでいる(そのうち3～7ページは紛失されたままであり、1～2および29ページはさいきん発見された)。

その後、第Ⅱ～Ⅲ篇(第1巻)が執筆されたのであるが、シュティルナーの名著「唯一者とその所有」を批判する過程で、唯物論的歴史把握にかんする大きな2つの理論的前進がみられた。マルクスとエンゲルスは、この2つの新しく獲得した理論的成果を、シュティルナーにかんする篇からフォイエルバハにかんする篇に移すべくぬき出したのである。このいわば理論的挿入の第1のものは、「歴史における精神の支配」にかんするシュティルナーの観念論的見解の批判との関連でおこなわれたものであり、マルクスによるページづけのうち30～35ページの6ページをふくんでいる^④。第2の理論的挿入は、「ブルジョア国家、競争および私有財産と国家・法の相互関係」にたいするシュティルナーの見解を批判したさいに書かれたもので、マルクスによるページづけのうち40～72ページの33ページをふくんでいる。^⑤

このように、新版編集者の考証によれば、(大きな束にふくまれていた)フォイエルバハにかんする3つの草稿は、ことなつた時期にことなつた観点から叙述されたのち、ひとつの場所にあつめられて連結させられたのである。^⑥

マルクスとエンゲルスは、3つの草稿をまとめたのち、2つの清書稿にとりかかつたのであるが、どういふわけか、いずれも途中で放棄されている^⑦。のこされた2つの清書稿は、冒頭部分がほとんど一致しており、第2のものは第1のもの書きなおしであることが推定される(第1清書稿の重複部分は抹消されている)。このことから、新版編集者は、つぎのような結論をえている。「清書稿の第1バリエーションと第2バリエーションおよび草稿第1部分〔時期的にさいしょの草稿—引用者〕とを比較してわかることは、後者つまり清書稿の第2バリエーションは、唯物論的歴史把握の諸前提にかんする断片(第1清書稿の抹消されていない部分)によって、かつ特定の場所において、補充されるべきである」^⑧。

したがって、第1巻第Ⅰ篇の草稿全体は、4つの部分(そのうちひとつは清書稿)から構成されることになる。新版における草稿材料の配列と分割は下記

のごとくであるが、便宜上、マルクスによるページづけと現行版（邦訳、マルクス・エンゲルス全集、第3巻、大月書店、1963年による）の該当ページを
 げておく。なお、分割にもなつてつけられた表題のうち、(I~§1.)と(II
 ~§11.)以外は編集者によるものである。

「ドイツ・イデオロギー」第1巻第I篇（草稿材料の配列、分割および表題

	I	清書稿	現行版
——(序説的評注)		1	13 ~ 14
§1. イデオロギー一般、とくにドイツの		2	14 ~ 15
§2. 唯物論的歴史把握の出発諸前提		—	16 ~ 17
§3. 生産と交通、分業と所有形態；種族的、古代的、 封建的。		3 ~ 4	17 ~ 20
§4. 唯物論的歴史把握の本質。社会的存在と社会意識		5	21 ~ 22
	II	草 稿	
§1. 現実的人間解放の条件（草稿5ページ欠）		1 ~ 2	—
§2. フォイエルバハの唯物論の直観性と不徹底性の批 判		8 ~ 10	38 ~ 41
§3. 本源的な歴史的関係、あるいは社会活動の基本的 な側面；生活手段の生産、人間（家族）の生産、交 通、意識		11 ~ 16	23 ~ 28
§4. 社会的分業とその結果；私有財産、国家、社会活 動の疎外		16 ~ 19	28 ~ 31
§5. 共産主義の物質的前提としての生産諸力の発展		18 ~ 19	30 ~ 32
§6. 唯物論的歴史把握の結論；歴史過程の継承性、歴 史の世界史への転化、共産主義革命の必然性		20 ~ 23	{ 41 ~ 42 32 ~ 33 65 ~ 66
§7. 唯物論的歴史把握にかんする要約		24 ~ 25	33 ~ 34
§8. 従来の上べての——とくにヘーゲル以後のドイツ 哲学の——観念論的歴史把握の破産		25 ~ 28	35 ~ 37
§9. フォイエルバハ——その観念論的歴史把握への補 足的批判		28 ~ 29	{ 37 ~ 38 603 ~ 604
	III		
§1. 支配階級と支配的意識。歴史における精神の支配			

にかんするヘーゲル的表象はいかにして形成されたか。 30~35 42 ~ 46

IV

—(草稿4 ページ欠)

	36~39	—
§1. 生産用具と所有形態	40~41	61 ~ 62
§2. 物質的労働と精神的労働との分割。都市の農村からの分離。同業組合制度	41~44	46 ~ 48
§3. そのつぎの分業。商業の工業からの分離。種々の都市のあいだの分業。マニファクチュア	44~50	49 ~ 55
§4. もっとも広汎な分業。大工業	50~52	55 ~ 57
§5. 社会革命の基礎としての生産諸力と交通形態との矛盾	52~53	69 ~ 70
§6. 諸個人の競争と階級の形成。諸個人とその生命活動条件の発展。ブルジョア社会における諸個人のみせかけの共同性と共産主義のもとでの諸個人の現実的統合	53~59	{ 57 25 49 ~ 50 66 ~ 67 70 ~ 73
§7. 生産諸力と交通形態との矛盾としての諸個人とその生命活動条件との矛盾	60~62	67 ~ 69
§8. 歴史における強力(征服)の役割	62~64	{ 19 60 ~ 61
§9. 大工業と競争の条件における生産諸力と交通形態との矛盾の発展。労働と資本の対立	64~66	{ 62 69 62 ~ 63
§10. 私有財産廃棄の必然性、条件および結果	66~68	{ 63 ~ 65 32
§11. 所有にたいする国家および法の関係	68~72	57 ~ 60
§12. 社会意識の諸形態	72	597~598

① Новая публикация первой главы «Немецкой идеологии» К. Маркса и Ф. Энгельса, Вопросы философии, No. 10, 1965, стр. 79~118

② この対応表を作成するさいには、広松渉氏の論文中に示されているもの(「ドイツ・イデオロギー」編輯の問題点、唯物論研究、1965年春号、108ページ)を若干手を加えた上で利用させていただいた。

③ 1962年に発見された第1巻第1篇に属する2つの断片には、それぞれ1~2ペー

ジ、29ページであることが確認されているが、これらのページとエンゲルスによるボーゲン番号との対応関係は報告されていない。広松氏は、従来から存在していた第1ボーゲンのb面（つまり第28ページ）の末尾の文章は中断されており、明らかにc面が存在し、それが紛失した第29ページであろうと考証されている（唯物論研究、掲、122ページ参照）。しかし、発見された1～2ページについては、もしボーゲン番号があれば、多分第1ボーゲンのa、b面かb、c面かであると推定されるだけで確証は何もない。

- ④ 第1の理論的挿入がさいしよに敘述された位置は、邦訳「マルクス・エンゲルス全集」第3巻（1963年、大月書店）、167ページ前後であろう。
- ⑤ 第2の理論的挿入がさいしよに敘述された位置は、邦訳「マルクス・エンゲルス全集」第3巻（1963年、大月書店）、350ページ以下の部分であろう。なお新版編集は、第2の理論的挿入を第36ページから第72ページまでの合計37ページだとしている。したがって、第36～39ページの4ページにわたる欠落部分を第2の理論的挿入のうちにくくめていることになるが、その根拠は明らかでない。
- ⑥ エンゲルスによってつけられたボーゲン番号が6にはじまり92でおわっていないから、そのうち12～19、22～83の合計70ボーゲンを欠いているという謎は、草稿執筆過程の新しい考証から、だいたいにおいて説明されるように思われる。すなわち、ボーゲン番号は第1巻第I篇にだけつけられたものではなく、第II篇以下をもふくむ一貫したボーゲン番号としてつけられたものではないかということ、そして前述の計画変更と2つの理論的挿入の過程で草稿の一部を移動（第II篇より第I篇へ）させたさいに不可避免的に欠落を生じたのではないかという推定がそれである。このことは、欠落の大きさと、2つの理論的挿入部分がさいしよに執筆された位置との対応関係からも、ある程度推定される。しかし、第1巻第II篇以下のボーゲン番号については、その存否すらも報告されていないし、したがって上述の推定には確実な根拠はない。
- ⑦ バガトゥーリヤは、清書稿の中断についてつぎのようにのべている。「草稿の清書部分は完結していない。この篇の第2部分との対比によって、マルクスとエンゲルスが自分たちの歴史観を積極的に敘述したあとで最新のドイツ哲学のくわしい批判に立ち戻らなければならなかった、と考えることができる」。См. Г. А. Багатурия, Структура и содержание рукописи первой главы «Немецкой идеологии» К. Маркса и Ф. Энгельса, Вопросы Философии, No. 10, 1965, стр 112
- ⑧ Б. А. Багатурия, Структура и содержание рукописи первой главы «Немецкой идеологии» К. Маркса и Ф. Энгельса, Вопросы Философии, No. 10, 1965, стр 111

(2) 新版第 I 篇の4つの部分と叙述構成

前掲のような草稿材料の再構成によって、「ドイツ・イデオロギー」第1巻第 I 篇における叙述の内的論理は、旧版とは比較にならぬほど明りょうに示されることになる(以下、主としてバガトゥーリャ前掲論文による)。草稿の第1部分(清書稿)は、青年ヘーゲル派の哲学的見解の一般特徴づけからはじまっている(I~§1.)。それにつづいて、マルクス・エンゲルスは、青年ヘーゲル派の観念論にたいして自分たちの唯物論的見解を対置するのであるが、そのさいはじめに、唯物論的歴史把握が出発する諸前提が定式化されている。すなわち、それは、現実的諸個人、彼らの活動ならびに彼らの生活の物質的諸条件であり、諸個人の活動は生産(自然にたいする人間の関係)および交通(人間相互の関係)の2つの側面をもっているということが定式化されている(I~§2.)。つづいて、唯物論的歴史観そのものが叙述される。歴史過程の基礎は生産の発展であるから、第1に分業(生産力発展の外部的表現)の発展と所有形態(生産諸関係の法的表現)の交替が考察されている。すなわち、種族的、古代的、封建的(I~§3.) (草稿ではここに余白があり、叙述は完了していない。しかしそれは、草稿第4部分の第2~4セクション(IV~§2、3、4)で補足されており、そこではブルジョア的所有形態がくわしく考察されている)。さいごに、唯物論的歴史把握の本質が要約されている(I~§4.)。

第2部分は、第1部分と同じように、青年ヘーゲル派の観念論にたいする一般的評注、「哲学的解放」と現実的人間解放の条件との対置(II~§1.)およびフョイエルバハの唯物論の直観性と不徹底性の一般的批判(II~§2.)をもってはじまっている。その後で、やはり第1部分と同様、原著者たちの理論が積極的に論述されている。この叙述は、人類史における本源的な前提の検証からはじまる。すなわち、人間は「歴史をつくり」うるためには生きなければならないし、食物、飲物、住居、衣服などをもたなければならない。したがって、第1の歴史的行為(そして社会活動の決定的側面)は、物質的生産である。さらに本源的な歴史的關係(それは同時に社会活動の基本的側面でもある)(II~§3.)自然的分業から社会的分業への移行およびこれにもとづく第2次的な歴史的關係の発生(II~§4.)および生産諸力発展の結果としての、社会的分業とその諸結果を絶滅するものとしての共産主義革命の物質的諸前提の形成(II~§5.)が考察されている。物質的生産のこうした歴史的考察は、余白への覚書によっておわっているが、この覚書から、ここではさらに交通部

面と政治的上部構造との独自の考察が予定されていたことがわかる（この企図は、草稿の第4部分の第5～11セクション（Ⅳ～§5、6、7、8、9、10、11）で実現されている）。草稿中のかなりの空白のあと、つぎに、唯物論的歴史把握からひき出された諸結論の叙述（Ⅱ～§6.）そして第1部分と同様、唯物論的歴史把握の本質にかんする要約（Ⅱ～§7.）がつづく。このように、新しい歴史理論の積極的叙述をおこなったあとで、マルクスとエンゲルスは、ふたたび観念論の批判にもどっているが、ここではすでに新しいレベルにおいてである。彼らは、従来のすべての観念論的歴史把握、とくにヘーゲル以後のドイツ哲学（Ⅱ～§8.）の歴史把握のあやまりを批判し、フォイエルバハ（Ⅱ～§9.）の歴史把握における観念論を批判している。

草稿の第3部分の叙述は、2つの目的をもっておこなわれている。第1の直接的目的は、観念論的歴史把握はどのようにして発生したのかという問題の解明である（この意味では、それは草稿第2部分を補足するものである）。同時にここでは、社会の階級構造にたいするイデオロギー的上部構造の関係が解明されている（この意味では、それは草稿第4部分を補足するものである）。

草稿の第4部分は、生産諸力と生産諸関係との相互関係の問題からはじまっており、それはさしあたりまず、生産用具と所有形態との相互関係の形で考察されている（Ⅳ～§1.）。つづいて先史および先史の基本的発展段階、私有財産のブルジョア的形態、とくに同職組合・マニユファクチュア・大工業が叙述されている（Ⅳ～§2、3、4）。さらに、生産部面から交通部面への移行がつづき、生産諸力と交通形態との弁証法が定式化されている（Ⅳ～§5.）。つづいて、諸関係の全体つまり諸個人——階級——社会が検討される（Ⅳ～§6、7、8、9、10）。生産と交通の両部面が考察されたのち、つぎには上部構造部面への移行がおこなわれ、政治的上部構造、土台にたいする国家と法の関係が考察されている（Ⅳ～§11.）。さいごに、草稿の末尾は、将来の仕上げのための覚書でおわっており、その大部分（草稿の第72ページ）は、イデオロギー的上部構造にかんする思想の素描である（Ⅳ～§12.）。覚書の末尾（ページづけのない第73ページ）は、清書稿の冒頭部分の素描と考えられる。というのは、ここでは、のちに清書稿のなかで研究された所有諸形態——社会経済構成体にかんする学説の萌芽——のさいしょのグループわけがみられるからである。^①

以上によってわかるように、相対的に独立の5個の草稿（それは執筆の時期と目的からみて4部分にわかれる）は、叙述の内的論理によって相互に連結す

る全一体をなしているのである。執筆経過からみてさけられなかった主題の重複や思想の成熟度における差異をとめないながらも、草稿の各部分は相互に補足しあい、相合して唯物論的歴史把握のさいしょの体系的叙述をなしていることはまちがいない。

- ① 旧版ではいずれも、草稿末尾(ページづけのない第73ページ)の素描のはじめは、Gemeindeeigentum になっているが、新版では、Grundeeigetum, Gemeindeeigentum, feudales, modernes..... の順序に変更してある。

(3) 新版第 I 篇における叙述内容の内的論理

4つの部分からなる第 I 篇全体は、論述されている理論内容からみて、4つの基本ラインを内包している。

第1のライン。唯物論的世界観と観念論的世界観との対置、観念的歴史把握の批判と唯物論的歴史把握の積極的研究。このラインは、第 I 篇全体にたいしてエンゲルスが与えた副題からすでにわかるように、基本的なものである。観念論的歴史把握の批判のためには、とくに、序論的評注(I~§1.)、(II~§1, 2, 8, 9) および(III~§1.)があてられている。それ以外のすべてのセクションは、主として唯物論的歴史把握の積極的論究にあてられている。

第2のライン。唯物論的歴史把握の前提、本質および結論(このばあいの主要な結論は、プロレタリアートによる共産主義革命の必然性と不可避性である)。科学的共産主義理論の土台としての唯物論的歴史把握。このうち、唯物論的歴史把握の前提は(I~§2.)において、その本質は(I~§4.)および(II~§7.)において、結論は(II~§6.)において、それぞれ定式化されている。

共産主義革命の必然性の基礎づけは、ほとんどすべての主要問題を考察したさいに、とくに、(II~§5, 6)および(IV~§10)において与えられている。たとえば、社会的分業の結果としての国家にかんする問題を考察するさいに、プロレタリアートによる政権奪取の必然性すなわちプロ独裁の必然性にかんする結論が与えられている(II~§4.)。

第3ライン。唯物論的歴史観。生産諸力と生産諸関係——政治的・イデオロギー的上部構造。このラインは、とくに第4部分で叙述されている。すなわち、(IV~§1, 2, 3, 4, 5)で生産諸力と生産諸関係との相互関係が考察され、(IV~§6, 7, 8, 9, 10)で社会の階級構成が、(IV~§11.)で土台つま

り生産諸関係にたいする政治的上部構造の関係が考察されている。さらに第 4 部分の末尾の覚書をみると、イデオロギー的上部構造にかんする問題の究明が予定されていたことがわかる (IV~§12.)。草稿第 3 部分は、社会の階級構造にたいする社会意識の関係すなわちイデオロギー的上部構造の関係が考察されているという意味において、第 4 部分末尾 (IV~§12.) の計画を補足するものといってよい。

第 4 ライン。唯物論的歴史観、すなわち生産諸力の発展と所有形態の交替。前階級社会、階級社会、無階級的・共産主義的社会。このラインは第 2 部分を支配している。ここでは、(II~§3.) で、人類社会発展の最初期にすでに人間社会に固有でありまた同時に人類社会の全発展段階の不可欠の成分である社会活動の基本的な諸側面が考察されている (歴史的なもの論理的なものとの統一の例)。(II~§4.) では、社会的分業の結果としてあらわれる社会発展の第 2 段階 (階級社会) が考察されている。さいごに、(II~§5.) では、無階級的・共産主義的社会への不可避の移行が考察されている。生産諸力、分業の発展および所有形態の交替 (社会構成体説のはじまり) は、(I~§3.) および (IV~§4.) で叙述されている。

第 I 篇の叙述内容のうえからとらえられた基本ラインは以上のようなものであるが、これらの 4 つのラインは当然たがいにからみあい移行しあいながら、この篇全体のゆたかな理論内容を構成しているのである。

(4) 年代的成熟度からみた草稿の三層区分と再構成プラン

さらに、草稿材料の構成と叙述内容の成熟度の観点から分析をくわえてみると、唯物論的歴史把握にかかわる全問題の総体的叙述を与える 3 つの層、3 つのサイクル、3 つの企図を識別することができる。時期的にさいしょのサイクルは第 2 部分 (第 1 草稿) に、第 2 のサイクルは第 3、第 4 部分 (第 2、第 3 草稿) に、さいごに第 3 のサイクルは第 1 部分 (清書稿 1、2) に、それぞれ対応する。

これら 3 つのサイクルを比較してみると、その叙述構成における一定の類似性、問題範囲と相互補足における一定の一致をあきらかにすることができる。とくに、第 1 層とさいごの層とを対照させてみることによって、叙述の一般的構想——第 I 篇全体のプラン——を再編することができるのである。

事実この 2 つの部分 (時期的にさいしょのものとさいごのもの) を比較して

みると、すでにみたように、草稿第1部分(第3層)のはじめと第2部分(第1層)のはじめとのあいだ、(I~§2.)と(II~§3.のはじめ)とのあいだ、(I~§3.)と(II~§3, 4, 5)とのあいだ、(I~§4.)と(II~§7.)とのあいだ等々に一定のアナロギーがあることがたやすくわかる。

もっともこのアナロギーは、两部分のあいだに存在する深い質的相異をのぞきはしない。一例をあげよう。(II~§3, 4, 5)では、歴史過程の唯物論的見かたが発展させられている。同様の歴史観は(I~§3.)の内容をなしているが、しかしいっそう高いレベルにおいてである。すなわち、草稿第2部分(第1層)では、この歴史観はまだかなり抽象的・一般的性格をおびており、前階級の社会から階級社会を通じて無階級社会への人類史の発展が本質において考察されている。ところが第1部分(第3層)では、すでに第4部分(第2層)において生産諸力と生産諸関係の弁証法が定式化された(IV~§5, 6, 7)あとだけに、歴史観はすでにずっと具体的なものとなっており、すでに社会構成体の分析への移行、より正確に言えば、歴史的に相互に交替する生産様式の考察への移行がみられるのである。

さて以上のような草稿の構成と内容にたいする多面的分析にもとづいて、新版編集者バガトウーリヤは、マルクス・エンゲルスの一般的構想のアウトライン(「ドイツ・イデオロギー」第I篇の総括的プラン)をつぎのように再構成している。

1. 序論的評注
2. イデオロギー一般、とくにドイツのイデオロギー (I~§1, II~§1, 2)
3. 唯物論的歴史把握の諸前提 (I~§2, II~§3.)
4. 唯物論的歴史観。生産諸力、分業、所有形態の発展 (II~§3, 4, 5, I~§3, I~§1, 2, 3, 4)
5. 生産諸力と生産諸関係との弁証法 (IV~§5.)
6. 諸個人——階級、社会 (IV~§6, 7, 8, 9, 10)
7. 所有にたいする国家と法の関係 (IV~§11.)
8. 支配階級と支配的意識 (III~§1.)
9. 唯物論的歴史把握の諸結論。共産主義革命の必然性 (II~§6.)
10. 唯物論的歴史把握の本質にかんする要約 (I~§4, II~§7.)
11. 青年ヘーゲル派の観念論の批判 (II~§1, 8, III~§1.)

12. フォイエエルバハ批判 (II ~ § 2, 9)

あるいはもっと要約した形で再構成すれば、

- 1) ドイツ・イデオロギーの一般的特徴づけ
- 2) 唯物論的歴史把握の諸前提
- 3) 生産、交通、政治的・イデオロギー的上部構造
- 4) この歴史観の本質にかんする諸結論と要約
- 5) 観念論的歴史把握一般の批判、とくに青年ヘーゲル派とフォイエエルバハの批判

もちろん、複雑な構成と内容をもつ「ドイツ・イデオロギー」の第1巻第1篇を上記のように単純化し、要約して再編成することは、多くの欠陥をまぬがれない。このようなところみは、ことなつた時期にことなつた連関でかかれたいわば「静態的表現」を与えるにすぎず、草稿の多様な内容のうちのひとつの尺度で示すところみにすぎない。しかし、上記の再構成プランからわかるように、草稿材料の配列と分割の単純化だけが叙述内容の一般的描写と論理的基礎を一目瞭然たらしめるのである。このことによって逆に、草稿全体における研究と叙述の序列が、もともと唯物論的歴史把握の構造そのものによって深く規定されているということを確認することができるのである(理論と方法との弁証法の例)。

(5) 新版における理論内容の明確化——草稿 (II ~ § 3, 4, 5) より

草稿材料の正しい再構成は、「ドイツ・イデオロギー」第1巻第1篇の一般的構想や一般的特徴を鮮明にするだけではなく、この篇の個々のセクションや個々の命題の意味や内容を正しく理解する鍵をも与えることになる。一例として、草稿第2部分の3つのセクション (II ~ § 3, 4, 5) の内容を考察しよう。

例 1. 生産の5つの型

第3セクション (II ~ § 3.) の内容は、「生産の5つの型」というかんたんな定式で一般化することができる。このばあい、物質的生産(本来の意味での生産、必要生活手段の生産)が出発モメントであることはいうまでもない。つきに、「新しい欲望の産出 (Erzeugung——生産とほとんど同義である)」——これは明らかに欲望の「生産」であり、それ以外のものではありえない。第3に、人間(家族)の増殖は人間の生産であるという思想は、ほぼ40年後に、エンゲルスが「家族・私有財産・国家の起源」のなかですどく定式化したものである。すなわち、「唯物論的な見解によれば、歴史における究極の決定的契

機は、直接的生命の生産および再生産である。しかしこれは、それ自体2とおりにわけられる。一方では、生活手段の生産、すなわち衣食住の諸対象とそれに必要な道具の生産、他方では、人間そのものの生産、すなわち種の繁殖である。一定の歴史的時代および一定の国土の人間がそのもとで生活する社会的諸制度は、2とおりの生産によって制約される。すなわち、一方では労働の発展段階によって、他方では家族の発展段階によって」^① 第5に、「交通形態そのものの生産」にかんする思想は、マルクスがのちに草稿第4部分(Ⅳ～§7.)^②で定式化したものである。また、社会的諸関係の生産にかんする思想は、アネンコフ宛の有名な手紙^③および「哲学の貧困」のなかで、マルクスによって発展させられている。すなわち、プルードンは、「人間が一定の生産諸関係において羅紗、麻布、絹布を製造するものであることを非常によく理解した。しかし、これらの一定の社会的諸関係もまた麻布、リンネル等々と同様に、人間によって生産されるものであるということ、それを彼は理解することができなかった」^④のである。同様の思想が、「資本論」のなかで全面的に展開されたものであることはいうまでもない。さいごに、精神的生産つまり観念、表象、意識の生産についても、草稿の各所でたびたび語られている^⑤。

なお、このセクション全体を「生産の5つの型」の叙述とするこうした解釈は、「経・哲手稿」におけるマルクスのつぎの命題のうちのひとつの根拠をもっている。すなわち、「宗教・家族・国家・法・道徳・科学・芸術等々は、生産の特殊な諸様式にすぎないのであって、生産の一般的法則のもとにしたがう」^⑥ここでべられている思想——必要生活手段の生産が社会活動のすべての側面を深く規定しているのだから、人間のすべての生命活動はけっきょく生産の(すなわち物質的生産の)普遍的法則にしたがうことになるという思想は、すでに1844年におけるマルクスの基本的発見のひとつだったのである。

例 2. 疎外論から分業論へ

第4および第5セクション(Ⅱ～§4, 5)の内容構成を明らかにすることはなほだ困難である。問題は、草稿のこの部分には2つの並行的テキストがあるという点にある。もっと正確にいうと、基本的テキストそれにたいする補足とがあり、両者を単一の叙述のうちに連結することは困難であり、したがって、このセクションの叙述の一般的ロジックを理解することがなほだ複雑となるのである。

他面、これらのセクションが大きな興味をよぶのは、ここにはたとえば、プ

口独裁の思想がはじめてのべられており、共産主義革命の前提が定式化されており、また先進資本主義国におけるプロレタリア革命の同時的勝利の可能性が結論されている等々、マルクス主義と歴史理論の視点からみてひじょうに重要な叙述がみられるからである。

しかし、新版における草稿のこのセクションがとくにわれわれの関心をひくのは、「経・哲手稿」以前におけるマルクスの思想の核心をなしていた疎外理論と「ドイツ・イデオロギー」で展開された唯物論的歴史把握との関係の問題（いわゆる疎外理論の進化の問題）にたいして、新しい接近の可能性がひらかれたからである。事実、「ドイツ・イデオロギー」執筆当時における疎外問題の状態は、これらのセクションを通じてかなりの程度具体的に考察することができるのである。

第4セクションでのべられている社会的分業の質的にことなる3つの結果——私有財産、国家、社会活動の疎外——のあいだの連関については、一見したところはっきりしないようにみえる。しかし、「経・哲手稿」と対照してみるとことによって、社会的分業の3つの結果として提示されたものが「疎外」の3つの型の転化形態として理解しうることがわかる。事実、マルクスは「経・哲手稿」のなかで、疎外の3つの基本型を、①労働生産物の疎外、②労働過程（人間の生命活動）そのものの疎外、③人間の類的本質の疎外（人間の人間からの疎外）^⑦としておさえていた。「ドイツ・イデオロギー」においては、第1の疎外型にたいして私有財産が対応し、第2の疎外型にたいしては社会活動の疎外が対応し、第3の疎外型には国家が対応している。「ドイツ・イデオロギー」では、私有財産、国家、社会活動の疎外の3つはいずれも社会的分業の結果として考察されているが、「経・哲手稿」においては、分業と各疎外型との相互関係は本質的にことなる解釈を与えられていた。^⑧

さて、以上のように第4、第5セクションの理論内容を疎外論の発展として理解するとき、第6セクションにおいて与えられている唯物論的歴史把握の4つの結論^⑨の内的論理がひじょうにはっきりしてくる。この4つの結論はすべて共産主義革命の必然性を示すものである。第1の結論は共産主義革命の前提を定式化したもの、すなわち私有財産の廃棄を定式化したものであり、第2の結論は国家の問題にふれている。第3の結論は、社会活動にまといついているふるい性格の廃棄の必然性についてのべたものである。したがってこれら3つの結論は、社会的分業とその結果の廃棄の必然性を表現するものといえる。さ

いごの(第4の)結論は、革命が二重の過程であるという思想の確立である。つまり革命をおこなう階級は、環境をつくりかえるだけでなく、同時に自分自身をつくりかえるという結論が提示されている。^⑩

第4および第5セクションの上述の例からわかるように、時間的にも内容的にも「経・哲手稿」にもっとも接近している草稿第2部分のなかでは、疎外概念は(根本的に変化してはいるが)やはり維持されているのである。

他面、つぎのような諸事実を対照してみることは重要である。第1のサイクル(草稿第2部分)→疎外概念の存在とその間接的利用、前階級的・階級的・無階級的社会の考察、抽象的な歴史観。

第2のサイクル(草稿第4部分)→疎外概念の外面的欠如とその不利用、生産諸力と生産諸関係との弁証法にかんする命題の形成。

第3のサイクル(草稿第1部分)→疎外概念の完全な欠如、主要な所有形態の考察、社会構成体説のはじまり、具体的な歴史理論。

この対照が明らかに示すように、「ドイツ・イデオロギー」のなかでは、唯物論的歴史把握の発展につれて、マルクス主義の思想体系のなかでの疎外カテゴリーの地位と比重が根本的に変化してゆくのである。

さらに注意しなければならないのは、つぎの事実である。というのは、「経・哲手稿」のうち第3の、年代的にはさいごの手稿の末尾において、すでにマルクスは、分業概念にたいしてとくにつよい関心を示しているのであるが、(「分業と交換との考察は、きわめて興味がある」^⑪)、「ドイツ・イデオロギー」段階では、分業カテゴリーがはなはだ本質的な役割を演ずるようになるという事実である。(もっとも、その後生産関係という範疇が形成されるとともに、分業概念は後景にしりぞくような印象を与えるのであるが)。「ドイツ・イデオロギー」では、分業カテゴリーは、一方では生産諸力の発展水準の表現として、他方では生産関係の基礎として理解されている。このことから結論できるのは、マルクスは、分業の考察を通じて、すなわち歴史過程において分業の発展が演じた役割の分析によって、生産諸力と生産諸関係との弁証法を理解したということである。いいかえれば、「ドイツ・イデオロギー」における唯物論的歴史観の形成は、まさに分業論を契機としておこなわれたということである。

ところで、この3つのセクション(Ⅱ～§3、4、5)の一般的連関はどうか。まず、物質的生産が人間社会の基礎である。分業の発展にあらわれる生産諸力は、本源的・自然的分業につづいて現実的・社会的分業を発生させ

る。この現実的・社会的分業とともに、社会の階級分裂が発生し、さらに私有財産、国家、社会活動の疎外が発生する。生産諸力のいっそうの発展は、共産主義革命の諸前提、および必然性を生み出すのであるが、この共産主義革命こそが社会的分業の諸結果、すなわち私有財産、国家、社会活動の疎外を廃棄するのである。かくして、過去において生産諸力の発展が私有財産を必要としたのにたいし、いまでは生産諸力のいっそうの発展のためには、私有財産の廃棄が必要なのであり、プロレタリア革命とプロ独裁による共産主義的無階級社会の創出が必要である、ということになる。

以上、「生産の5つの型」についての思想の発展、および疎外論から分業論へのマルクス主義の進化の問題にかんして示された2例は、草稿新版の研究がどのような新しい成果を結ぶかの実例として、編集者バガトゥリヤによって提示されたものである。たしかに、この実例からわかるように、「ドイツ・イデオロギー」第1巻第I篇の正しい構成と内容を学問的流通にひきこむことから期待しうるものは、はかり知れないほど大きいにちがいない。

- ① F. エンゲルス、「家族、私有財産および国家の起源」、邦訳、マルクス・エンゲルス選集、第13巻、大月書店、1950年、256ページ
- ② マルクス・エンゲルス全集、第3巻、邦訳、大月書店、1963年、67～68ページ。
- ③ マルクスからアネンコフへの手紙、邦訳、マルクス・エンゲルス選集、第1巻、大月書店、1952年、263～266ページ。
- ④ K. マルクス、「哲学の貧困」、邦訳、マルクス・エンゲルス全集、第4巻、大月書店、1960年、133ページ。
- ⑤ マルクス・エンゲルス全集、第3巻、邦訳、大月書店、22、32～33、42～44ページ参照。
- ⑥ K. マルクス、「経済学・哲学手稿」、邦訳、国民文庫、大月書店、1963年、147ページ。
- ⑦ 同上、103～108ページ参照
- ⑧ 同上、183～192ページ参照。
- ⑨ マルクス・エンゲルス全集、第3巻、大月書店、1963年、65～66ページ参照。
- ⑩ 同上、209、592～593ページ参照。
- ⑪ 「経済学・哲学手稿」、邦訳、前出、191ページ。

II 資料——現行版の改編（配列と分割の変更）のための指示

以下、各セクションの表題のうち、編集者のつけたものは〔 〕のなかに入

れてある。指示ページは、現行版(邦訳、マルクス・エンゲルス全集、第3巻、1963年、大月書店)によるもの。たとえば、(13上5~15下6)とあれば、同書第13ページ上段第5行目より第15ページ下段第6行目までを示す。

I. フォイエルバハ

唯物論的な見かたと観念論的な見かたとの対立

(I)

<ドイツのイデオロークたち……とっくりと眺めてみる必要がある>
(13上5~14上10)

[1. イデオロギー一般、とくにドイツ・イデオロギー]

<ドイツの批判は……思いもよらなかった> (14下14~16下5)

[2. 唯物論的歴史把握の出発諸前提]

<われわれが出発点として……条件づけられている> (16下6~17下12)

[3. 生産と交通。分業と所有諸形態; 種族的、古代的、封建的]

<違った諸民族相互間の……階級関係は完全に発達している> (17下13~19上4)

<私的所有の発展につれて……1人の君主を頭にいただいた> (19下15~21上22)

[4. 唯物論的歴史把握の本質。社会的存在と社会意識]

<かくて事実はこうである……歴史的事例に即して明らかにするであろう> (21下1~23下14)

(II)

[1. 現実的人間解放の条件]

<「人間」の「解放」は……局地的意義をもつたたかいである> (60上3~下6)

(草稿5ページ欠)

[2. フォイエルバハの唯物論の直観性と不徹底性の批判]

<〔……〕実際において……明らかである> (38下13~41下2)

[3. 本源的な歴史的関係、あるいは社会活動の基本的な側面; 生活手段の生産、人間(家族)の生産、交通、意識]

<無前提的なドイツ人……解されねばならぬ> (23下16~25上13)

<さて労働における……おのずから明らかである> (25下12~28下2)

的表象はいかにして形成されたか]

〈支配階級の思想は……………駆けさせられることができる〉 (42下1~46上1)

〈ドイツにおいて……………明らかにされなければならない〉 (46上10~16)

〈日常生活では……………ことごとおりに信じる〉 (46上4~9)

(IV)

[1. 生産用具と所有形態]

〈[……]見いだされる……………可能なのである〉 (61上10~62上10)

[2. 物質的労働と精神的労働との分割。都市の農村からの分離。同業組合制度]

〈物質的労働と精神的労働……………不首尾におわった〉 (46上22~48下1)

〈これらの都市における……………身分的な、資本であった〉 (48下19~49上6)

〈労働の分割は……………仕事の鬼であった〉 (48下2~18)

[3. そのつぎの分業。商業の工業からの分離。種々の都市のあいだの分業。マニュファクチュア]

〈労働の分割が……………しだいに溶けはじめる〉 (49上7~下5)

〈ある地方で……………de navigation et de marine)〉 (50下8~55上5)

〈資本の運動は……………A. スミスを参照〉 (55上6~18)

[4. もっとも広汎な分業。大工業]

〈17世紀に商業とマニュファクチュアが……………——及ぼす〉 (55下1~57上7)

* * *

〈これらのさまざまな……………範囲でおこなわれた〉 (57上22~下3)

[5. 社会革命の基礎としての生産諸力と交通形態との矛盾]

〈生産力と交通形態との……………ありがちなことなのである〉 (70上1~13)

〈かくてわれわれの……………表面化された)〉 (69下14~23)

[6. 諸個人の競争と階級の形成。諸個人とその生命活動条件との対立の発展。ブルジョア社会における諸個人のみせかけの共同性と共産主義のもとでの諸個人の現実的統合]

〈競争は諸個人を……………変わりないであろう〉 (57上8~23)

〈家屋建築……………自明である〉 (25上14~23)

〈(各人はピンからキリまで……………階級の先在)〉 (71下11~17)

〈各都市の市民は……………示唆してきたところである〉 (49下6~50上22)

〈この諸個人の発展を……………解することができる〉 (71下1~10)

〈労働の分割による……………自由を手に入れる〉 (70上16~下13)

〈諸個人はいつでも……………おこなわれたのである〉 (71下22~73上5)

〈これに反してプロレタリアたち……………ことにそうなのである〉 (73上19~下7)

〈忘れてならぬことは……………明らかである〉 (73上6~18)

〈かくて、逃亡する農奴たちは……………国家を倒さねばならない〉 (73下8~19)

〈これまでずっと……………交通形態のことにすぎない〉 (70下15~71上22)

〈共産主義が……………思うわけでもない〉 (66下15~67上12)

[7. 生産諸力と交通形態との矛盾としての諸個人とその生命活動条件との矛盾]

〈人格的個人と……………形態をうけとった)〉 (67上12~69下5)

[8. 歴史における強力(征服)の役割]

〈この歴史観全体に……………断たれることがありえた〉 (19上5~下11)

〈歴史のなかでは……………(カルル大帝その他)〉 (60上18~61上7)

[9. 大工業と競争の条件における生産諸力と交通形態との矛盾の発展。労働と資本の対立]

〈大きな工業と競争においては……………成り立つことができる〉 (62上12~下18)

〈(個々の国の……………居すわりつづけた)〉 (69下6~12)

〈したがって、ここに……………離ればなれになっている〉 (62下19~63下8)

[10. 私有財産廃棄の必然性、条件および結果]

〈したがって、いまや……………可能であったわけである〉 (63下9~65上8)

* * *

〈市民社会は……………この名称でよばれつづけてきた〉 (32下8~20)

[11. 所有にたいする国家および法の関係]

<所有の最初の形態は……よぎなくされていた> (57下5~60上17)

[12. 社会意識の諸形態]

<学問に及ぼす分業の影響……歴史は存在しない> (597下5~12)

<なぜイデオロークたちは……事態は逆立ちしている> (598上1~19)

<宗教はもともと……法、宗教等々にとって> (598上20~下3)

<諸個人はつねに……発展に依存している> (598下4~11)

<土地所有。共同体所有。封建的なそれ……産業資本> (598下12~13)